

令和元年6月25日現在

機関番号：32501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02907

研究課題名(和文) 古代中国における地理情報の文書化過程 - 出土文字資料から『水経注』『山海経』へ

研究課題名(英文) The documentation process of the geographic information in ancient China

研究代表者

村松 弘一 (MURAMATSU, Koichi)

淑徳大学・人文学部・教授

研究者番号：70365071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国古代の地理情報の文書化の過程について、秦漢代の堤防建設や災害による移住など地域開発の視点から、出土文字資料も含め検討をおこなった。黄河流域では漢代から堤防を建設し管理した。漢代に黄河流域で発生した水害の被災農民は黄土高原北部からシルクロードへと移住し、オアシス灌漑という新たな生産方法による開発に従事した。長江流域では北方の城壁に由来する「塙」と呼ばれる小規模な堤防・溜め池が建設された。地理情報の文書化は、その具体的な語(例えば、堤や塙、新秦中)がどのような開発の経緯で建設・設置されたものなのかという歴史的背景をとまなうことによって、地域性や時代性を理解することができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで『山海経』や『水経注』といった地理書として、地理情報を文書化する過程に関する研究はあまりおこなわれてこなかった。本研究では、当初、出土文字資料から文書化過程を探ることを目的としたが、研究をすすめるなかで、堤防や「塙」(堤防・池)、オアシス灌漑といった技術や「新秦中」(黄土高原北部)や河西回廊などの地域開発の変化が及ぼす、地理情報の変化も分析した。今後は東アジアという広がりの中で、水害など災害の被災民や異民族でなれば強制的に移住させられ、「生業転換」をした人々に対して、どのような技術・開発方法の地理情報を伝授したのかという問題(地理情報の集積から提供)についても考える必要があるだろう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to elucidate the process of the documentation of geographical information on ancient China. I paid attention to regional development (construction of embankment and move) and the excavation materials in Qing Han dynasty. (1)The government constructed and managed the embankment at the Huang river basin from Han dynasty.(2)Many victims of an accident of flood damage in the Huang river basin moved to the north area of Loess Plateau(New frontier) in the age of Han dynasty. After that the victims moved to the silk road and was engaged in development of oasis irrigation.(3)Small-scale embankment and pond which derive from castle wall of the north China were constructed at Chang Jiang basin. This embankment and pond were transmitted to Korean Peninsula after it.We can understand the process of the documentation of geographical information by knowing a historical background of technological expanse and regional development.

研究分野：中国古代史

キーワード：中国古代 地理認識 交通路 堤防 環境史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代中国で編纂された『山海経』『水経注』などの地理書に書かれた地理情報には自然地理情報(山・海・河の地形や森林分布等)と人文地理情報(都市・水利施設や妖怪・祭祀)が複合的に記されている。それらがどのように集められ、整理されたのかについては、科研費基盤研究(C)「中国古代地理情報システムの基礎的研究-天水放馬灘秦墓地図を事例として」(2011年度~2013年度)で秦の華北地域に関する事例研究をおこなった。そこで、近年出土資料が発見・公表されつつある、長江流域の歴史地理をも視野に入れ、さらなる古代における地理情報の文書化について考察することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代中国における地理情報(Geographic Information)の文書化過程を検討することにある。古代中国では多くの「地理書」が編纂され、なかでも、漢魏代までに原型が整った『山海経』『水経』は、中国大陸全土における山・海・河川についての詳細な地理情報が書かれた地理書であり、それはまた地理情報の集積庫であると言える。本研究では中国の南方の長江流域をもフィールドに含め、近年発見・収集・公表されつつある出土文字資料にも着目し、古代における地理情報の文書化がどのようにおこなわれたのかを解明する基礎研究をおこないたい。

3. 研究の方法

本研究では秦漢時代の地理情報の文書化の過程を(1)長江流域の都市の変遷はどう記されるのか? - 点の地理認識(2)秦漢時代、長江流域の距離はどのように測定したのか? - 線の地理認識(3)秦漢時代、長江の洪水を防ぐ堤防はどのように建設されたのか? - 防災と地理認識などの視野から検討を加えることを当初の研究方法としておこなった。その際、手始めに清華大学蔵戦国楚竹簡「楚居」、里耶秦簡・北京大学蔵秦簡「里程簡」、香港中文大学所蔵竹簡「河堤簡」など、近年発見された出土文字資料を手がかりに「河堤簡に関する地理情報の分析」「秦漢時代の交通路と環境認識」といったテーマについての研究をすすめ、そのなかで、「黄河・長江における堤防の建設」、「災害による被災民の移住と新たな地域開発の方法」、「東アジアにおける「塙」(堤防・溜め池)と長江流域開発」など、新たな検討課題も現れ、年次を追って検討項目に加えていった。

2015年度は(1)「河堤簡に関する地理情報の分析」- 香港中文大学所蔵竹簡「河堤簡」の地理情報に対する分析をすすめた。特に、近年、本漢簡に関して発表された Brian Lander“ State Management of River Dikes in Early China: New Sources on the Environmental History of the Central Yangzi Region ”(T'oung Pao, Volume 100, Issue 4-5, 2014)の分析内容の再検討をすすめた。本論文では漢簡の示す地域は漢水-長江中流域に関するものという前提で考察をおこなっている。(2)「秦漢時代の交通路と環境認識」- 中国・復旦大学歴史地理研究所の郭涛氏を招聘し、里耶秦簡等の最新の簡牘資料を利用した交通路に関する共同研究をおこない、11月に国際研究集会「秦代交通地理研究の新史料」(学習院大学)を実施した。また、本研究に関わる論文も含む村松弘一『中国古代環境史の研究』(汲古書院、2016年)を刊行した。

2016年度は(1)「河堤簡に関する地理情報の分析」- 香港中文大学所蔵河堤簡について再度検討を加え、伝世文献で長江流域の堤防を「河堤」と記した事例が見られないことから、この木簡にかかれた堤防の所在地は、当初の想定の長江流域ではなく、黄河流域であった可能性があるとの認識を得た。従前の史料でも漢代の長江流域での堤防建設は確認できず、黄河の堤防について改めて資料を収集・整理した。中国水利史研究会では「秦漢時代水利史研究の新展

開」と題し、黄河河道の復元と水害の問題について長谷川順二氏・濱川栄氏と議論した。(2)「秦漢時代の交通路と環境認識」- 国際研究集会をおこない南開大学の夏炎氏、復旦大学の費傑氏、陝西師範大学の高昇栄氏を招へいし「漢代における災害救済の変化と環境」「関中における灌漑と塩池」と題した口頭発表をおこなった。

2017 年度はこれまでの二年間の研究実績に基づき、海外の研究者との共同研究を一層すすめるため、日本に招聘された黄学超(復旦大学)、段清波(西北大学)、張青瑤(陝西師範大学)の各氏とのディスカッションによる学术交流をおこなった。特に、古代秦漢時代の陝西省の昆明池の水利システムや山西省の土地利用に関して、本研究の『水経注』とかかわる貴重な意見交換ができた。また、本研究も関連するテーマの共編著書『馬が語る古代東アジア世界史』(汲古書院)を刊行した。

2018 年度には、古代中国における「地理認識」と水利・灌漑・防災(水害)の問題について国内外の討論会などで報告し、議論を深めた。シンポジウム『関中平原開発史～考古学と歴史学からみる「人と水資源」』(中部大学)では、「秦都の変遷と関中平原の開発～西垂から咸陽へ」と題して、関中平原の地域開発について、周から漢に至るまでの周原地域に着目して、その支配と水利用、地理認識について討論した。また、シンポジウム「古代東アジアの文物交流とシルクロード」(韓国・慶北大学校博物館)では、「古代東アジアの治水・灌漑とシルクロード」と題して、「塙」と呼ばれる堤防型の水利施設がシルクロードを通じて西北の羌族から華北の黄河中下流域、長江下流域そして朝鮮半島へと広がった過程を考察した。

4. 研究成果

秦漢時代の地理情報の文書化の過程は、出土文字資料の発見によってその一部分の理解は可能となったと言える。しかし、地名の比定や都市遺跡の調査・発掘などより具体的・確定的な研究成果が不可欠である。研究を通じて、以下のような副次的なものも含めた研究成果および研究の展望を得ることができた。本研究で設定したテーマのなかでも、特に「防災と地理認識」に関する漢代の堤防の建設と水利灌漑・災害防止について、多様な角度から考察をおこなうことができた。

- (1)「河堤簡に関する地理情報の分析」- 「河堤簡」に記載されたような大きな河川流域の堤防は、長江流域というよりも黄河流域に建設されたもので、その管理は行政によってひとつひとつ管理されていた。長江流域には本流の沿岸に大規模な堤防が建設されなかったと考えられる。
- (2)「黄河・長江における堤防の建設」- 黄河流域には漢代の人工的な堤防の遺跡が多く場所に残っており、堤防による防水害がはかれるとともに、黄河の水を引水した(もしくは洪水を利用した)灌漑農業がおこなわれたと考えられる。
- (3)「災害による被災民の移住と新たな地域開発の方法」- 前漢代の瓠子の河決等により、長期の水害で被災した農民は黄土高原北部(河套平原・新秦中)へと移住し、灌漑水利による開発をおこなうが、塩害が発生し、失敗。さらに、武帝期に河西回廊・朝鮮半島・南海へと領土を拡大し、黄河下流域・新秦中から当該所に移住し、移住者はオアシス灌漑など西方周辺地域の新たな農業生産方法による開発に従事したと考えられる。その技術は西方の異民族との交流のなかで得られたと思われる。
- (4)「東アジアにおける「塙」(堤防・溜め池)と長江流域開発」- 古代朝鮮半島で溜め池の堤防を意味した「塙」は、その歴史を探ると、晋・南朝の長江下流域にも「塙」=堤防の存在が確認出来る。現在の钱塘江流域には塙の名称が残るが、溜め池・堤防のある谷を示す。

長江流域には長大な堤防が建設されるというよりも小規模な溜め池とそれを締め切るための堤防が建設された。なお、漢代初期の塙は河西四郡の出土資料や黄河流域の防壘（小さな城壁）を意味する。その語源は、羌族にかかわるものとされる。

地理情報の文書化は、その具体的な語（例えば、堤や塙、新秦中）がどのような開発の経緯で建設・設置されたものなのかという歴史的背景をとともなうことによって、地域性や時代性を理解することができる。特に、シルクロードを通じた周辺異民族からの地理環境に応じた技術の移転なども重要な要素と考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- (1) 村松弘一「中国古代関中平原の水利開発と環境 - 鄭国渠から白渠へ」、『史学』85-1~3号 (三田史学会) 119-139頁、単著、査読有り、2015年
- (2) 桐本東太「陝北・山東画像石の類似点をめぐる覚え書き:冥界への到達手段を中心に」、『史学』85-1~3号 (三田史学会) 97-118頁、単著、査読有り、2015年
- (3) 恵多谷雅弘・鶴間和幸・村松弘一「多衛星データを用いた秦帝国の空間的考察」、『学習院大学国際研究教育機構研究年報』3号、共著、査読有り、2017年
- (4) 村松弘一「钱塘江流域上流の塙と開発」、『近現代太湖農山漁村における自然資源管理に関する現地調査』平成25~28年度科研費研究成果報告書』、単著、査読無し、2017年
- (5) 恵多谷雅弘・鶴間和幸・村松弘一「衛星リモートセンシングデータと歴史資料を用いた秦東門考察:『太平寰宇記』を中心に」、『学習院大学国際研究教育機構研究年報』4号、共著、査読有り、2018年
- (6) 村松弘一「秦漢時代関中平原・黄土高原の環境と馬 漢代厩牧システムの形成と崩壊」、『馬が語る古代東アジア世界史』汲古書院、2018年

〔学会発表〕(計9件)

- (1) MURAMATSU Koichi "Image of Loess Plateau in China: The environmental history of the Qin-Han Empire" Association for East Asian Environmental History (AEAHE), Kagawa University, 単独、2015年10月
- (2) 村松弘一「中国古代関中平原の歴史空間学 複合情報の統合化」、『史学会大会シンポジウム「歴史空間学の可能性」』、東京大学、単独、2015年11月
- (3) 村松弘一「『天下三分の計』前夜 『三国志』を生んだ後漢時代の地域創生」、『大阪経済大学日本経済史研究所』、2015年
- (4) 村松弘一「秦漢時代関中平原の環境と馬」、『国際シンポジウム「古代東アジア都市の馬と環境」』、学習院大学、2016年
- (5) 村松弘一「秦漢時代水利史研究の新展開:『中国古代環境史の研究』・『前漢期黄河古河道の復元:リモートセンシングと歴史学』をめぐって」、『中国水利史研究会大会』、大阪教育大学、2016年
- (6) 村松弘一「漢代における災害救済の変化と環境」、『国際シンポジウム「中国古代の災害と環境」』、学習院大学、2017年
- (7) 村松弘一「関中における灌漑と塩地」、『国際シンポジウム「中国渭河流域の水利環境の変遷」』、学習院大学、2017年
- (8) 村松弘一「古代東アジアの治水・灌漑とシルクロード」、『シンポジウム「古代東アジアの

文物交流とシルクロード』、慶北大学校博物館（韓国）、2018年

(9) 村松弘一「秦都の変遷と関中平原の開発～西垂から咸陽へ」シンポジウム『関中平原開発史～考古学と歴史学からみる「人と水資源」』、中部大学、2019年

〔図書〕(計2件)

(1) 村松弘一『中国古代環境史の研究』、汲古書院、単著書、497頁、2016年2月

(2) 村松弘一・鶴間和幸『馬が語る古代東アジア世界史』汲古書院、共編、432頁、2018年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

国際特別集会「秦代交通地理研究の新史料」(2015年11月27日、学習院大学)を実施した。

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：桐本 東太

ローマ字氏名：KIRIMOTO Tota

所属研究機関名：慶應義塾大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 60205044

(2) 研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。